

2018年度イラン短期研修プログラム 報告書

2019年1月31日

浅井万由子

参加日時：2018年12月20日（木）～12月30日（日）

場所：Tehran, Isfahan, Kashan

研修内容：SIRでの講義 / SIRの学生とのディスカッション、プレゼンテーション / 外務省、経済産業省、国会議員、駐イラン日本大使などとの面会 / 観光

所感、成果：

今回のイラン短期研修への参加を通して、研修前に持っていたイランに対するイメージが大きく変わりました。アメリカの核合意離脱や、トランプ大統領の発言など、国際的に報道されるイランについてのニュースからでは、あまりイランに対して良いイメージがありませんでした。しかし、漠然としたイメージだけで、その国や人々について判断してはいけない、もっと理解したいと感じ、今回の研修に応募しました。大学では、アメリカ現代政治学ゼミに所属しているため、アメリカとイランの国家関係の悪化や、トランプ政権、またアメリカの同盟国である日本に対してどのような意見を持っているのか、イランの学生や人々に聞きたいと考えていました。そこから、イランとアメリカの国家関係悪化の中で、今後日本がどのような立ち位置を取っていくべきなのかについて、この研修を通して考えました。

実際にプログラムに参加して感じたイランの人々の私の印象は、非常に平和に対する意識が高く、細やかな気配りを大切にし、人と議論することを好む人々という印象です。そして1979年に、イラン革命を起こした国民が未だ社会の中核を占め、この革命の歴史が人々の記憶に残っていることから、国民1人1人が「自分が国家をより良くする」という意識を持っているように感じました。どのようにイランが国際社会と関わり、今後さらに発展していくことができるかについて関心を持っている人ばかりでした。前述したように、平和的な国民性ではあるものの、これまでイランが歩んできた歴史の中で、イランの豊かな資源などを巡った外国からの干渉によって、一国家として自立、独立することが出来ない時期が長く続いたことから、彼らの「防衛」に対する意識は

非常に高く、自国は自分たちで守らなければならないという意識が今回のアメリカとの核合意離脱問題にも繋がっていると感じました。現地の人のアメリカに対する意見としては、政府に近い人ほど、あまり意見を述べようとしない印象がありました。ただ、若者の間ではアメリカの文化が流行したり、対話を重視する人もいるようにイラン社会の中でも意見は分かれているようです。

イランには石油、天然ガス、鉄鋼など豊かな資源が数多くあるため、アメリカによる経済制裁下においても、イランと関わり続けることは、資源を輸入に依存する日本にとって重要なことだと感じました。しかし、日本の同盟国であるアメリカのトランプ政権がイランに経済制裁を与えている現在、政治的な立場上、日本がアメリカの指示を完全に無視して、イランと経済活動を行うことは、予測不可能なトランプ政権を刺激することになりかねないため、避けた方が良いかもしれません。このような状況下で、日本がイランとの関係を保ち続けるためには、両国の企業や人の交流が重要になってくると考え、その力の1つに将来、私自身も関わることができたら嬉しいです。SIRのNazrahari教授やArdakani教授は、日本企業の知識や技術力を活かすことができる分野として、水資源の確保や、太陽光エネルギー、またアメリカによる経済制裁対象外である医療機器などを挙げていました。このような今回の研修で学んだことを活かして、今後イランや中東地域と日本が協力して、何ができて、どのように協力していけるのかについてさらに考えていきたいと思います。

